

教会の形成と部落

東岡山治



の実態を調べ廻った。

昭和二十四年秋、商学部で学生であった私は宗教部の修養会で大変なことを聞いた。サバー宣教師が講演の中で「キリスト教徒は水平社の問題に興味をもたねばならない」と語られたからである。日本人の誰もがタブーとして来たこと、特に教会内では無関心になっていた未解放部落の差別の問題を、外人からきこうとは夢にも思わなかった。

翌日からこの問題に関する本を大学の図書館で貪り読んだ。あるだけの本を読み終った頃、部落への伝道を使命と感ずるようになされた。三条や七条、田中の街を歩きつつ差別

の献身して神学部に移り、神学生として大阪西成教会や滋賀の堅田教会で実習に奉仕し、来るべき日に備えた。堅田では近くの竜花部落で井戸堀りのワークキャンプで汗を流した。

献身以来、家からの支援が断たれたので、貧困と病苦に悩まされつつ、成績最低でやつと大学院を押し出してもらった。

新島先生の墓前に参り「在学中成績は悪うございましたが、卒業したら大いにやりますから見ていて下さい」と心にわびつつ誓って若王子を下った。この年、昭和三十年であった。

広島時代

任地は広島市にある福島町という中国地方最大の未解放部落地域であった。ミス・ジョンズ宣教師が数年前先に建設するかも判らないというセツルメントに宗教主事と同和主事という任務をうけ、半信半疑のまま教会も施設もない原爆の町ヒロシマにやって来た。

同志社の先輩、上栗先生の養護施設内に仮り住いさせてもらい、部落の実態調査を始めた。

差別の実態を知れば知るほど、私はじっとしておれなくなり、とにかく何かやろうと決心し、路傍で子供を集め、集会をした。

六月十二日夜、旧授産場であった会館で約二百名の子供を集め、大子供大会を開いて伝道を始めた。以後、毎日曜夜、大勢の子供が押しかけて来てくれるので私一人ではどうにもならない。地域の有志青年の助けを幸いにどうやら集会は続けられた。乱暴な子もあつたので困ってしまった、神の愛を説きながらいうことをきかない子は遠慮なくなぐりつけることが多かった。「主我を愛す」の歌を歌わせて騒動する子をなぐったが、後年その少年が

同志社時代

昭和二十四年秋、商学部の学生であった私は宗教部の修養会で大変なことを聞いた。サバー宣教師が講演の中で「キリスト教徒は水平社の問題に興味をもたねばならない」と語られたからである。日本人の誰もがタブーとして来たこと、特に教会内では無関心になっていた未解放部落の差別の問題を、外人からきこうとは夢にも思わなかった。

翌日からこの問題に関する本を大学の図書館で貪り読んだ。あるだけの本を読み終った頃、部落への伝道を使命と感ずるようになされた。三条や七条、田中の街を歩きつつ差別

から「しっかりやれよ」と言われた時、何んとも言えないうれしさがこみ上げて来た。広島市内外の牧師・信徒に事あるごとに部落問題を訴えつつ、町に入っては路傍伝道をして廻った。

トラクト配布、原爆被爆者病床見舞、公衆便所への奉仕（古新聞を小さく切って百枚単位において廻る）、小中学生の補習、ハム工場への映画伝道等々多忙な毎日を過した。

昭和三十三年六月、広島キリスト教社会館建設と同時に五名の受洗者が生れた。彼らは皆あの子供会以来、求道を続けた兄弟姉妹であった。そのうちある人は医者となり、ある人は献身して牧師夫人となられた。

その頃、部落解放同盟の作った映画「人間みな兄弟」をかつて山口県、広島県、島根県の各教会を巡回し、部落啓蒙活動を行なった。一方教区教団に対し、部落伝道委員会の設立のため力を注いだ。まずアンケートを作り、そのアンケートを添えて部落伝道部の必要を説いたので、反対する者はなかった。

三十三夏ミス・ジョンズは休暇で帰国して以来なぜか帰って来なかった。この事は私にとってショックだった。彼女は部落解放運



堅田町竜花の日曜学校の生徒